

The Chimes の教育書としての可能性

近 藤 千 代

Abstract

The purpose of this paper is to examine the possibility that *The Chimes* (1844) assumed the aspect of an educational book to enlighten the poor and lead them to reclaim their lives.

In *The Chimes*, the visions that Toby, the main character, sees on New Year's Eve exemplify the cruel in security that forces the poor to suicide. The horrible spectacles appeal to the readers' sympathy and urge improvement in the social condition of the disadvantaged. However, the work can be viewed, in the light of Dickens strong beliefs in lifting up the poor through education, as a direct appeal to the lower classes to improve their own lot.

The *Chimes* exposes two kinds of "ignorance". Toby becomes possessed with the idea that the poor are naturally bad and have no business on earth, overlooking the irrationality of the higher-classes because of his "ignorance". Other people may have become depraved from their ignorance of Biblical precepts, though their depravity is more a result of society's neglect.

I conclude that *The Chimes* was meant to enlighten the working class people themselves through a satire on hypocrisy and prejudice of the higher classes. And that Dickens intended for the poor to perceive the importance of education based on the Bible in order to save themselves from depravity and death in vindication of the despair that had driven so many to suicide.

序

A Christmas Carol (1843) が、初版6000部の売れ行きを記録し大成功を収め、その後相次いで出版されることとなった Christmas Books の第二作目として、*The Chimes* (1844) は世に送り出された。しかし、*Martin*

Chuzzlewit (1843-4) と並行して執筆し始められた *A Christmas Carol* が難なく完成したのとは対照的に、*The Chimes* の構想を練る段階で Charles Dickens (1812-70) は苦心することになる。評判があまり思わしくなかった *Martin Chuzzlewit* の脱稿後に家族でゼノアに滞在していた Dickens は、ロンドンから離れた土地で *The Chimes* の執筆に執りかかろうとするが、ロンドンから遠く離れたその町は Dickens に靈感をなかなか与えてくれない。そのような苦しみに襲われていたとき、ゼノア中に鳴り響く鐘の音が彼の耳に飛び込んできて、Dickens は作品のインスピレーションをつかみとる。その時の興奮と着想は、John Forster に宛てた一行だけの手紙 “We have heard THE CHIMES at midnight, Master Shallow!”¹ が如実に語っている。この *The Chimes* の主人公 Toby Veck が鐘の音に生きる活力や絶望感を耳にし、また鐘の霊に幻の世界へといざなわれるように、Dickens 自身が鐘の音に導かれ身体から湧き出るような靈感を猛烈な勢いで作品として吐き出していったのである。

A Christmas Carol がクリスマスに起きる出来事であるのに対し、*The Chimes* の出来事は新年を翌日に控えた大晦日に起こる。この作品には、ロンドンの下層階級の人々、お針子²、娼婦たちの悲惨な生活が描き出され、当時頻繁に起きていた放火、そしてなによりも、社会問題となっていた自殺が影のようにつきまとう。Dickens は貧困者の惨状を描き出し、その理解と改善を読者に求めて、*The Chimes* の最後に “O listener, dear to him in all his visions, try to bear in mind the stern realities from which these shadows come; and in your sphere — none is too wide, and none too limited for such an end — endeavour to correct, improve, and soften them.”³ と訴えているのだ。ところで、この表現からは、読者の対象が労働者階級以外であり、彼らの惨状を改善するための行動はあくまでも労働者階級という枠組み外で起こされるもののように聞こえる。つまり、この作品の労働者階級に与える影響はあくまで受動的なもの

であり、直接的な影響がないかのようである。しかし、貧困に喘ぐ下層階級の悲惨な現実と社会問題に読者を直面させ、裕福な偽善者と労働者を比較させる社会風刺という手法の中に、この作品が労働者階級の人々に対して与えるメッセージが含まれていると読み取れないであろうか。本稿論では、*The Chimes* が、苛酷な現実を生きる貧困層の人々を啓蒙し、聖書に基づいた道徳教育を織り込んだ教育書として読むことができる可能性を考察していきたい。

I

The Chimes が世に出る一年前、Dickens は Benjamin Disraeli (1804-81) と共にマンチェスターに於いて労働者の教育と生活改善についての講演をしている。その時に Dickens が力説したこととは、貧困と無知が犯罪を生み出し、教育こそが社会問題を解決する鍵となる、ということであった⁴。労働者階級の未来を築くには自尊心と教育が不可欠であり、「自尊心の喪失のために貧しい人々は自殺を犯してしまう」というのが彼の考えだったと B. T. Gates は指摘する⁵。この「貧困」と「無知」が Christmas Books 最初の二作品のテーマと考えられている⁶が、*Christmas Carol* では、ロンドンの貧民街に「貧困」と「無知」という名の子供を登場させ、守銭奴の Scrooge が貧しい人々の実情を目のあたりにするのに対し、*The Chimes* では主人公の Toby 自身が貧困層であり、彼らの「貧困」と「無知」が不幸へと繋がっていくというように、主人公の階級と目線が異なる。

この主人公 Toby は、公認配達屋 (a ticket-porter) であり、60歳の高齢でありながら真面目に働く正直者である。しかし、毎日のように新聞で労働者階級の犯罪を目にするうちに、自分たちは生まれながらにして悪人ではないかと思いは始める。娘の Meg が恋人 Richard との結婚話をするために持ってきた労働者階級の御馳走のストライプを食べようとしたところ、そこを通りかかった三人の紳士のうちの一人、“facts on figures” (103) の信望者

である Mr. Filer に、彼の計算によるとストライプが不経済であり、それを食する Toby は寡婦と孤児たちの口からストライプを横取りしていると結論付けられる。また、この Mr. Filer は、Meg の結婚話を聞くと、“Married! Married!! The ignorance of the first principles of political economy on the part of these people … .” (103) と叫ぶ。彼は、貧困者は “no earthly right or business to be born” (104) であるのと同じように、“no right or business to be married” (104) であると説得するのは難しいと語気を強くする。これらは数学的に証明されており、この「統計上の事実」を理解できないのは彼らが「無知」であるが故だと言う。もう一人の紳士、“a plain man, and a practical man” (102) と自称する市参事会員 Cute は、愛想が良く、労働者階級が使う言葉を交えながら話すなど、労働者たちのことをよく理解していると自負する。彼は、貧困者の問題解決のためには、“you may PUT DOWN anything among this sort of people, if you only know the way to set about it” (103) と、飢餓、貧しい人妻、子供のいる病人など貧困に関わるすべてのこと、とりわけ自殺を法律で禁止すると断言する。この皮肉とも聞こえる “a Justice” (104) と表現される市参事会員 Cute は、ロンドン市長の経験もある当時のミドルセックス知事 Sir Peter Laurie (1778-1861) がモデルだとされ、Dickens が彼の自殺禁止令と判事 (justice) としての偽善的な態度に強い憤りを抱いていたことに関係する⁷。

“The good old times, the good old times!” と繰り返す三人目の紳士は英国青年党一員と思われ⁸、彼らの労働者階級に対する「貧困」と「無知」の理解は、階級的蔑視の上に実情に目を向けず感情を介入させない非人間的なものであり、労働者階級の人々の未来を閉ざすものと考えられる。

しかし、この無慈悲で偏見に満ちた三紳士の話を聞きながら Toby は “Wrong every way. Wrong every way! … Born bad. No business here!” (106) と自分たちは生来の悪人であり、この世に無用であると思い込んでいく。市

参事会員 Cute の使いで手紙を配達するために Sir Joseph Bowley 邸を訪れた Toby は、この思いをさらに強くしていく。自分を “I am the Poor Man’s Friend” (110) と呼ぶ Joseph は、“I am your perpetual parent. Such is the dispensation of an all-wise Providence! Now, the design of your creation is — not that you should swill, and guzzle, and associate your enjoyments, brutally, with food . . . but that you should feel the Dignity of Labour.” (111) と勤勉でありながらも飢えている労働者 Toby に対して「神の摂理」を説く。

さらに、節制をして慎ましく生き、金銭的に几帳面であり、身の程をわきまえて常に従順であれば自分を “your Friend and Father” (111) だと思ってよいと付け加える。彼は、労働者階級からの見返りを期待しない寛大な人物であるように装ってみるが、その実、“Ingratitude is known to be the sin of that class. I expect no other return.” (111) という言葉が示すように心底には労働者階級への侮蔑の念が見てとれ、慈善事業の寄付金を出し惜しみする功利主義の Bowley 夫人と共に偽善者にほかならない。そして、“I do my duty as the Poor Man’s Friend and Father; and I endeavour to educate his mind, by inculcating on all occasions the one great moral lesson which that class requires. That is, entire Dependence on myself. They have no business whatever with — with themselves.” (112) (下線筆者) と自分こそ貧困者の教育をするべき人物だと言うのだ。

Sir Joseph Bowley の口から発せられる「神の摂理」は、労働者階級の人々が自分達の実情に不満を抱かずに忍従させるためのものであり、「教育」や「道徳的教訓」には、実のところ、労働者階級の自助への否定的な態度が表れている。ヴィクトリア朝の労働者階級対象の教育施設で実際に見られたように、Bowley が言う聖書の教えも教育も、社会階級的支配を強固なものにするための手段であると読み取れるであろう。そして、この偽善的な Bowley の言

葉から、この作品で主張されている労働者階級に必要な教育とは、それと性質を異にするもの、つまり、階級社会において歪められていない聖書の教えを学ぶこと、そして、自己啓発だと受け止められるのではないか。

しかし、Toby は、このような階級意識と偏見に満ちた偽善者たちを立派な人物たちであると敬い、彼らの言葉に、“Ah! Born bad!” (111) と自分たちを責めるのである。そして、新年を明日に控えてまだ借金を完済していないことを責められ、自分はやはりどうしようもない人間だと思ひ込む。昼間の時点で、いつもは活力をもらい親しみを感じている鐘の音から何の教訓も引き出せずにいた Toby は、この帰り道、もう鐘を見上げることもしなくなってしまう。その後、大晦日を過ごす宿もないという Will Fern と彼の幼い姪 Lilian を助け、自分の家で大晦日を過ごすようにはからい気分を高揚させるが、小さな子供を道ずれにした母親の自殺の新聞記事を目にし、とうとう “Unnatural and cruel! None but people who were bad at heart, born bad, who had no business on the earth, could do such deeds. It’s too true, all I’ve heard to-day; too just, too full of proof. We’re Bad!” (122) と絶望する。そして、いつもと違う鐘の音に導かれて、塔まで上がり意識を失う。

そこから先は、鐘の霊に導かれて夢か幻かわからぬ世界を見ていくことになるのだが、その世界は悲惨そのものである。Toby は、その世界が9年後であり、自分が塔から飛び降り自殺をしたことを知る。Lilian は、Meg と共に辛いお針子仕事をしていたが、娼婦になり Meg の腕の中で息絶える。また、市参事会員 Cute に結婚を思いとどまるよう唆された Richard は、Meg との結婚を破棄し、その後零落れた人生を送るようになる。最終的に Meg が更生させるのを目的として彼と結婚するが、立ち直ることなく遂には病に倒れ、貧困の中に死んでしまう。また、Meg にとって、仕事も収入もなく病に臥せる彼との結婚は、家計を支えるためのお針子としての苦汁労働に加えて看護というさらなる労働と心労を生じさせるものであり、ますま

す貧困に苦しむ。Fern は、度重なる投獄の末に自暴自棄になり、放火をすると Meg に伝えにやってくる。そして、その時、Meg の子供のことを「母親を失ったころの Lilian そっくりだ」と言ったことから、Meg は娘の将来を悲観し、絶望の末に娘を抱いて入水自殺をはかろうとする。これらの死は、それぞれ、貧困と不条理な社会から生じた絶望に起因することを読者に伝えており、同情と改善の心を奮い立たせるものである。

それでは、貧困者自身に対しては、このような社会が生み出した絶望から救出されるためにはなにが必要だと主張されているのか。上層階級が言及する貧困者たちの「無知」や「教訓」に対して、Toby が最終的に自身で気付く「無知」と「教訓」は、次のように表現されている。彼は、自分の娘 Meg が赤ん坊を心から愛していることを何度も感じ、重なる苦難の末に無理心中を図ろうとする姿を目の当たりにして、“Pity my prescription, wickedness, and ignorance, and save her!” (156) (下線筆者) と叫び、自分たちがどうしようもない生来の悪人ではないということを悟る。そのことに気付いていなかったことこそ、“ignorance” だと考えるのだ。そして、次のような学ぶべき教訓を引き出す。“I know that we must trust and hope, and neither doubt ourselves, nor doubt the good in one another. I have learnt it from the creature dearest to my heart. … O Spirits, merciful and good, I take your lesson to my breast along with her!” (157) (下線筆者)

Toby という貧困者の目を通しての社会は、上層階級の強い階級意識に根付いた不条理さや労働者階級の人々の惨状を明らかにするだけでなく、労働者階級の人々から自身の「悪人説」を拭い去る力が含まれており、「無知」からの脱却を示唆している。そして、労働者階級の人々に自尊心と共に重要なのは希望であると悟らせているのだ。Toby は、夢の世界を見る前にも、自分たちがこの世で無用な存在ではないかとの疑念を抱くたびに、希望に満ちた娘 Meg に小さな生きる価値を見出す。彼女の目は、“beautiful and

true, and beaming with Hope.” (94) であり、“With Hope so young and fresh; with Hope so buoyant, vigorous, and bright, despite the twenty years of work and poverty on which they had looked” (94) と描写されている。Meg のこの希望は夢の世界では消え失せていて、その変貌ぶりに彼は、“Beautiful she was, as she had ever been, but Hope, Hope, Hope, oh where was the fresh Hope that had spoken to him like a voice!” (131) と驚愕しているのだ。

希望を持つことの重要性を訴えている一方、この作品が労働者階級に与えた現実的な「希望」とは何であったであろうか。夢の世界から現実に戻ってきた Toby の周りでは希望にみち溢れている。時間は、Toby が鐘の音に導かれた大晦日であり、Meg は元日に挙げる Richard との結婚準備に追われて幸せそうである。夢の世界で、Meg は孤児の Lilian の生涯と自分の娘の将来とを重ねあわせて絶望するが、現実の世界での Lilian は孤独な少女ではない。Meg という優しい女性に可愛がられ、次に、母親の知人である Mrs. Chickenstalker を探し当て、彼女が頼りになる存在となるであろうという結末である。

しかし、ヴィクトリア朝の労働者階級の現実とは、そのような楽天的な展望がもてるものではなかったに違いない。この作品も、結婚式という幸せの絶頂で終わるが、クリスマスの奇跡が起こるわけではない。そもそも、Toby が見た惨状は、クリスマスではなく大晦日に見た夢か幻かわからぬ世界であるとされ、そこから「教訓」を得たものの「夢」と「現実」との境界は曖昧なのである。ここに、単なる夢物語としてではなく、貧困に苦しむ労働者階級の人々に切に訴えるものがあったのではないか。つまり、夢の世界で目にする人々の人生は、希望を失うことにより暗転した九年後の世界であり、夢から覚めた Toby が目にするのは、希望に満ちて未来へと向かう人々なのである。未来への希望を失えば、待ち構えているのは悲劇のみである。労働者階級の人々の心に届いた希望とは、Toby が Fern に励ましながら言った、

“Cheer up! Don’t give way. A new heart for a New Year, always!”

(121) という近い未来への思いであり、また、夢の世界で鐘の精霊に導かれて辿り着いた彼の教訓、“I know that our inheritance is held in store for us by Time. I know there is a sea of Time to rise one day, before which all who wrong us or oppress us will be swept away like leaves. I see it, on the flow!”(157) という将来への希望であったであろう。この革命をも思わせる言葉は、ほかならぬ労働者階級の人々に啓蒙として響いたにちがいない。

II

次に、当時の社会問題であった自殺とキリスト教的教育という点をもう少し考えてみたい。前述したように、Toby は幻の世界で鐘の塔から投身自殺をはかり、メグは入水自殺を図ろうとするのだが、自殺は、1840年代には人々の関心がとても高い社会問題となっていた。1838年に Margaret Moyes という23歳の女性がロンドンの大火記念碑から投身自殺をして以来、*The Chimes* が発表される前年の1843年までには、模倣自殺が相次ぎ、新聞や読み物が大いにそのことを書きたてて人々の懸念と関心を煽った⁹。自殺において人々が恐怖を感じたのは理由の分からぬ自殺であり、人々は自殺するだけの正当な原因を見つけ出そうと懸命になった。Margaret Moyes のセンセーショナルな自殺も、彼女が塔に登る直前に門番と話をしていたということ、またヴィクトリア朝の中産階級が抱いた「墮落した女性」でもなかったことが人々の恐怖と関心の的となったのである。

The Chimes でも、Toby が、幻の世界の中で鐘楼へと登り投身自殺をしようとするが、彼は自殺を決意して塔に登ったわけではない。彼は、“in his fascination, or in working out the spell upon him” (124) という状態で塔の上へ登り続け、意識を失い、塔から落ちるのだ。また、Toby は、もともと貧困であり¹⁰、慎み深く、労働に励む善人であることや、自殺当日は、

Fern や Lilian に施しをして陽気に過ごしていたことから、自殺理由が第三者からは不明なのである。表面的には、彼の自殺は、この当時の模倣自殺の様相を呈しており、この社会問題をなぞらえたものと考えられるのではないか。

一方、銀行家の Deedles も自殺する。この自殺に対しては、市参事会員 Cute がその原因をあれこれと推測し、“A most respectable man!” (134) であったと言いながら動揺を隠すことができない。そして、この自殺の原因を、些細なことで神経が狂ってしまったこととするが、狂気による自殺との見解は、不道徳と考えられた自己殺害者 (*felo-de-se*) と区別するものであり、財産が国王の所有のものになるとして没収されない手段であった¹¹ことにも関係するであろう。貧困者たちには自殺禁止令を唱える Cute が、社会的地位もあり裕福な紳士の自殺には哀悼の意を示すという不公平な態度に Dickens は非難を顕わにしているが、それと同時に、ヴィクトリア朝社会における自殺が貧困層だけが犯す “comfortable wickedness” (135) ではなかった¹²こと、そして、当時の自殺に対する人々の関心と反応を映し出しているのである。

Dickens は、自殺禁止法が貧困者に対する無慈悲な法律であると実際に抗議しており、この作品で貧困者の自殺を擁護しているとされている¹³。だが、Toby が自殺しようとする Meg を見て、“[She] perils her immortal soul, to save it!” (156) と神に救いを求めているように、自殺自体は、ヴィクトリア朝社会通念¹⁴と同じく、キリスト教の教えにおいて罪であるとの認識を持っていたと考えられる。それでは、どのように自殺する人々をキリスト教的概念に基づいて擁護し、道徳教育へと発展させているのであろうか。

Toby を動かす教会の鐘は、主教から洗礼を受けていたと述べられ、我慢強く、風に翻弄されることなく義理堅く、人を喜ばすためにその音を響かせる。そんな鐘と自らとの間に共通点があるように感じて親近感を抱く Toby は、“he having been as lawfully christened in his day as the Bells

had been in theirs” (89) と彼が洗礼を受けたキリスト教徒であることを再確認するように語られている。Toby もこの鐘同様、寒空の下で風に煽られながらも一向に屈せず、反対に空腹を紛らわしてくれる風に感謝の気持ちまで抱く人物である。そして、彼は、“He delighted to believe — Toby was very poor, and couldn’t well afford to part with a delight — that he was worth his salt.” (90) と勤勉さと労働の尊厳を忘れない。また、彼は、自分が空腹で苦しんでいるにも関わらず、寝る場所もないという Fern と Lilian に寝床となけなしの金で買った食事を提供する。しかも、自分の食べ物が無いことに気付かれないよう隠れて施しをする。これは、慈善事業の損得勘定をする Bowley 夫妻と対照的であり、「施しは隠れてするべき」という聖書の教えに符合する行いである。

また、鐘や Toby に吹き付ける風は、夜にはまるで甲高い笑い声や号泣の声をあげるかのように吹きすさび、鐘のある塔で絶叫し荒れ狂う。“It has a ghostly sound too, lingering within the altar; where it seems to chaunt, in its wild way, of Wrong and Murder done, and false Gods worshipped, in defiance of the Tables of the Law, which look so fair and smooth, but are so flawed and broken.” (87) というように、この風は、世の中の水面下に蔓延る諸悪を象徴しており、この風に易々と翻弄されない鐘との関係において、十戒に背く悪事や殺人や邪神崇拜に染まらずに懸命に生きる Toby の姿を浮き上がらせているのだ。この Toby が、夢の世界で自殺をはかったときは、ほかならぬ、彼に鐘の教訓が聞こえなくなった時である。ここで注目すべきなのは、彼は、鐘の音の教訓が聞こえなくなり自殺したものの、キリスト教徒として理想的な人物だということである。さらに、“the Goblin of the Bell” (128) は、Toby が自殺したことを咎めるのではなく、彼が鐘の響きを実利主義や禁止政策に同調しているものと感じ、零落した同胞である貧困者たちを悪人であるとの結論を出したことこそが、“wrong to Heaven and man, to time and to

eternity” (129) であると責め、このことに Toby の心は “penitence and grief” (128) に苛まれる。

一方、Meg も、父親と同様にキリスト教的美徳を備え、慈愛に満ちており、今や娼婦となり息をひきとりかけている Lilian に、“Sweet Lilian! Darling Lilian! Child of my heart — no mother’s love can be more tender — lay your head upon my breast!” (143) と言うような母性愛に溢れる女性である。また、娘として父親に生きる希望を与え、妻として夫に献身的で、母親として自分の子供に対して比類なき強い愛情を抱く女性であり、夢から覚めた Toby の目に入ってきた彼女は、“an Angel in his house” (157) のようであると喩えられている。このように、Meg という女性像は、完璧なまでの女性であり、当時の労働者階級対象の教育施設の指針がキリスト教に基づいた良妻賢母を育成するものであったことも考えると、労働者階級女性教育において模範とされる女性であると言えるだろう。また、“an Angel in his house” という喩えから、ヴィクトリア朝中産階級においても理想の女性像であるとも考えられる。さらに、Lilian の悔悛においては、マグダラのマリアに喩えられる Lilian に許しと深い愛を表わし、キリストをも彷彿させるのである。

Dickens は、このようなキリスト教者として理想的である二人の自殺から貧困者の自殺を擁護していると考えられるのだが、彼らの自殺に及ぶまでの原因を見てみると、これもまた単なる「自尊心の喪失」からの自殺ではないことが分かる。二人とも、自分自身の境遇を嘆いてではなく、自分の子供を愛するがために将来に不安を抱き、絶望に満ちてしまったことが自殺の要因なのである。Toby は、Meg の将来への不安が絶えず心に往来し、自分の娘を愛して止まないがゆえに、子供を道連れに自殺を図る母親を極悪人だと思い、自分たちの階級の人間に絶望して鐘楼へと向かう。Meg は娘への狂おしいほどの愛情から娘の将来に絶望し、死よりも辛い現実から娘を守るために入水自殺という「罪」を犯そうとする。つまり、ここで擁護されてい

る自殺は、キリスト教において理想とされる人物が、親子の愛情により犯す「罪」のみである。Toby が言うように、自殺こそしようとするが、Meg は “Heaven meant her to be good.” (156) なのであり、さらに、Toby の無上の愛情と悔悛とともに、自殺しようとする Meg の服に彼の手が届き、彼女の自殺は寸前で止められる。このように、結局、二人は自殺という「罪」を咎められることなく、反対に、この自殺者擁護を通して、労働者階級の人々にあるべき理想的人物として教示されているのである。

この二人とは対照的に、Dickens は、零落れて自殺の原因だと考えられる「自尊心の喪失」に至る貧困者を描いている。彼らは、キリスト教概念において理想的な人物とは言えず、また、自殺者擁護とは対極的に、彼らには死が待ち受けている。確かに、彼らの社会における惨状をさらけだして、彼らが貧困により犯罪や淪落への運命を辿る犠牲者であるとしているが、それと同時に、聖書を基にした教育の必要性を含意しているように思われるのだ。度重なる社会の仕打ちに自尊心を失い、最後には放火を犯す Fern は、貧困者たちが道を踏み外さずに生きていくためには、幼いころからもっとまじな住居や食糧が与えられ、思いやりのある法律を施行することが重要であることを述べる。だが、彼は、なによりも貧しい人々が貧困と苦境のために旧約聖書「ルツ記」の一説を “Whither thou goest, I can Not go; where thou lodgest, I do Not lodge; thy people are Not my people; Nor thy God my God!” (138) と変えてしまうような心になってしまうことを憂慮し、“you must put his rightful spirit in him first” (138) と嘆息するのだ。聖書と正しい精神との関連性を示し、社会改善の必要性とともに、聖書の教えを基盤とした教育の重要性をここに提示していると考えられる。

また、彼らの死は、彼らの行いが本質的に聖書の教えに背いたときにやって来る。心の救いを訴えていた Fern は、最終的に放火を犯すのだが、その放火を “what a Hell was lighted up inside of me” (153) と喩えていて、最早、彼の心には聖書の言葉は届かないことが分かる。Richard は、“fears,

and jealousies, and doubts, and vanities” (142) により Meg との結婚をとりやめて、その後、酒や賭博に手を出して零落してしまい、Meg の献身的な救いも空しく、更生することなく病死する。Lilian は貧困により娼婦になったに違いないが、Meg と共に苦汁労働であった針仕事をしながら、“Strike me old, Meg! Wither me, and shrivel me, and free me from the dreadful thoughts that tempt me in my youth!” (132) と言うように、誘惑に負けて零落れたことがほめかされているのだ。

Lilian の死については、さらに、女性教育的要素を含んでおり、自身を “I have fallen very low” (142) と 言 い、“beauty which she used to praise, all gone: all gone: and in its place, a poor, wan, hollow cheek” (142) と、零落したことによって、美しさも何もかもなくなってしまったと嘆く。そして、Meg の胸で許しを乞いながら、“His blessing on you, dearest love. Kiss me once more! He suffered her to sit beside His feet, and dry them with her hair. O Meg, what Mercy and Compassion!” (143) と、マグダラのマリアのことを言及し、悔悛しながら息をひきとる。

この娼婦である Lilian の悔悛と死は、Dickens 自身が娼婦たちを救済して更生させることの難しさを知っていたことや、実際は売春婦の自殺率が高くなかったとの指摘¹⁵を照らし合わせると、娼婦の典型的な最期であったとは考えにくい。むしろ、悔悛は理想であり、ヴィクトリア朝社会において、「墮落した女性」Lilian は死んでしまう運命であると見なされたと考えられるであろう。さらに、娼婦になって死んでしまう Lilian を Toby に案内して見せるのが少女の頃の姿の Lilian であり、彼女こそ、Toby に教訓を与えてくれる鐘の “the Spirit of the Chimes” (130) であり、また、“the Spirit of the child” (143) であるとされている。無垢な少女の姿の Lilian と娼婦になった後の Lilian のあまりにも変わり果てた容貌のコントラストは、後に発表される絵画 *The Awakening Conscience* (1853-54) のテーマにも

あるように¹⁶、幼くて無垢なころを思い出させ、自分の現在の罪から目覚めさせるといものではないだろうか。

後に、*Urania Cottages*¹⁷で新約聖書の教えに徹して「墮落した女性」を救済しようとしたように、娼婦に堕ちた女性が聖書にあるマグダラのマリアのように悔悛することを促すという、更生への導きが含まれていると考えられるのである。この聖書の教えに背き墮落して死を迎える貧困者たちが描かれることによって、キリスト教に基づく教育が、自分たちが招く死という意味の「自殺」から貧困者を救うことができる可能性を示している。

結び

以上、見てきたように、確かにこの作品には、下層階級の「無知」と「貧困」の問題が主軸となっており、その改善が訴えられている。しかし、社会改善のための社会風刺や社会問題をとりあげる手法において、下層階級の人々の将来のための希望や教育の必要性が、貧困層に直接訴えられていると考えられる。まず、下層階級の「無知」の追求は、現実社会において、上層階級の人々が下層階級に抱えている偏見、階級意識や偽善が暴かれる。彼らが、偽善的でありながら「立派な人々」である一方、*Toby*のような貧困者が「無知」でありながら善良であり、キリスト教の教えにおいて理想的な人物であるという対比から、貧困層の「無知」とは、自分達の存在価値に気付かず、自尊心や希望を失うことであることを提示している。

もう一つの「無知」は、貧困者を墮落していくことから救うためにキリスト教に基づいた教育が必要であることを主張するためのものである。この「無知」な貧困者が墮落していくまでの惨状を鐘の精霊が見せるという手法の中で、彼らが社会や貧困の犠牲者であるとしながらも、聖書の教えに背く行動をした結末として死を迎えさせている。これは、キリスト教上理想とされる人物が強い親子愛により自殺を犯すことを擁護する一方で、聖書の教えが心に届かなくなり、希望を失い、自尊心を失った者の死を、自ら招いた死であ

る「自殺」と捉え、悔悛や更生を促すものと考えられる。

この作品は、他の階級の人々に下層階級の「貧困」の社会的改善を求めながら、この二つの「無知」の追求において、下層階級への教育書のような役割を果たしていると考えられる。そして、自殺禁止令を批判するべく自殺者を擁護しながら、自尊心や希望を抱かせる教訓を与え、淪落を防ぐためのキリスト教的教育を展開することにより、貧困者が死から救われるためのエッセンスを込めているのだ。

注

- 1 John Forster, *The Life of Charles Dickens: 1842-1852. (V.2)* (Danvers : General Books LLC., 2009) その一文自体は、『ヘンリー四世第二部』第三幕第二場のせりふからの引用である。
- 2 お針子に関しては、Thomas Hood (1799-1845) の詩“The Song of the Shirt” (1843) が *Punch* に掲載され、Richard Redgrave (1804-88) が“The Sempstress” (1844) をロイヤルアカデミーに出展したことにより、その低賃金で苛酷な労働という惨状が人々の知るところとなっていた。その他、*Punch* では、Douglas Jerrold (1803-57) が、“The Story of a Feather” (1843) にお針子と娼婦をキリストとマグダラのマリアとして描き、後に John Leech (1817-64) は、“Needle Money” (1849) を“Pin Money” という絵と対で発表し、その貧しく惨めな生活と裕福な生活とを対比させ、お針子への同情と慈悲を訴えた。1850年には、G. F. Watts (1817-1904) が、同じく“The Seamstress” というタイトルの絵画を発表し、Redgrave の作品よりもさらに悲惨なお針子の姿を描きだしている。
- 3 Charles Dickens, *A Christmas Carol and Other Christmas Books* (Oxford: Oxford University Press, 2008) 161. 以下、本稿中の *The Chimes* からの引用はすべてこの版に拠る。ページ番号は引用末尾の括弧内に記す。
- 4 Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (Middlesex: Penguin Books, 1972) 180-182.
- 5 Barbara T. Gates, *Victorian Suicide* (Princeton: Princeton University Press, 1988) 50.
- 6 Wilson 182.
- 7 Gates 88.

- 8 Wilson 192.
- 9 Gates 39-47.
- 10 1839年10月に、15歳で自殺した Richard Hawes は、“clearly had not been seduced and abandoned; nor, as a poor boy, had he known financial reversal” (Gates 43) と、貧困が自殺動機だと考えられなかった。また、Emile Durkheim (1858-1917) は『自殺論』において、「経済的窮迫が、一般にいわれるほど自殺の促進をうながさないことをいっそうよく証明してくれるのは、経済的窮迫がむしろ反対的作用をおよぼしているという事実である。アイルランドでは農民はいたましい生活を送っているが、ここでの自殺はごくわずかである。・・・じつに貧困が人々を保護しているとさえいうことができる。」(デュルケーム 200-201) と自殺と貧困との関係を述べている。
- 11 Gates 39.
- 12 1823年5月26日の下院の議会で、Sir James MacKintosh (1765-1832) が改正前の自殺法について抗議しているのだが、この当時、既に、富裕層と貧困層の自殺に対する不公平さが問題視されていたのが窺える。“Verdicts of insanity were almost always found in the cases of person in the higher stations of life: where self-slayers were humble and defenceless, there *felo-de-se* was usually returned. This might perhaps be accounted for, without any imputations upon the impartiality of juries. First, because persons in high life had usually better means of establishing the excuse for the criminal act. Secondly, because suicide was rarely the crime of the poorer classes occupied with their daily labours. It was the effect of wounded shame; the result of false pride, and the fear of some imaginary degradation.” (*Catalogue of Parliamentary Report and a Breviate of Their Contents* 416)
- 13 Gates 51.
- 14 1823年の自殺法改正まで、*felo-de-se* (自己殺害者) は、心臓に杭を打ち込まれて、十字路に埋葬された。自殺法改正後も、“A *felo-de-se* must still be buried without Christian rites and at night, between the hours of nine and midnight, and his/her goods and chattels must still be turned over to the Crown.” (Gates 6) と宗教的制裁は強く、また、“If the Victorian pronounced *felo-de-se* in the 1830s and 1840s could be seen as suffering from “moral insanity”, he or she nonetheless remained the most miserable of sinners ….” (Gates 13) と、自殺に対する嫌悪感は根深いものであった。

- 15 William Acton, *Prostitution Considered in Its Moral, Social and Sanitary Aspects* (1857) (London: Frank Cass and Co., 1972) 38.
- 16 William Holman Hunt (1827-1910) が、1854年にロイヤルアカデミーに出品した作品。愛人となった女性が、彼女のパトロンの上で一緒に歌を歌っていたところ、その歌詞から無垢であった少女時代を思い出し、現在の自分の生活に罪と後悔の念にとらわれ、男性の膝から立ち上がるという瞬間を描いている。
- 17 Angela Georgina Burdett-Coutts (1814-1906) が私財を投じて、Dickens が管理役を務めた「墮落した女性」のための更生施設。1847年に開設された。

主要参考文献

- Acton, William. *Prostitution Considered in Its Moral, Social and Sanitary Aspects*. (1857) London: Frank Cass and Co., 1972.
- D'Cruze, Shani. *Crimes of Outrage*. DeKalb: Northern Illinois University Press, 1998.
- Dickens, Charles. *A Christmas Carol and Other Christmas Books*. Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens: 1842-1852*. [v.2]. Danvers: General Books LLC., 2009
- Gates, Barbara T. *Victorian Suicide*. Princeton: Princeton University Press, 1988.
- Payne, Edward F. and Harper, Henry H. ed., *The Charity of Charles Dickens: His Interest in the Home for Fallen Women and a History of the Strange Case of Caroline Maynard Thompson*. Boston: The Bibliophile Society, 1929.
- Purvis, June. *A History of Women's Education in England*. Milton Keynes: Open University Press, 1991.
- Spielmann, M. H. *The History of "Punch"*. Charleston: Biblio Bazaar, 2008
- Treuherz, Julian. *Victorian Painting*. London: Thames & Hudson, 2001.
- Vicinus, Martha., ed. *Suffer and Be Still*. Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1973.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Middlesex: Penguin Books, 1972.
- 尾高邦雄著『デュルケーム ジンメル』東京：中央公論社、1991.